



新年度に向けて—コロナ禍での方向性—

看護部長 辻村 淑子

第5波の感染者数を遥かに超える新型コロナウイルス感染症の第6波が押し寄せ数か月が経ちますが、未だに患者数ピークからの下降曲線がなだらかな丘のようで、方向性が見えない状態です。

人々が、何度も繰り返す感染拡大の状況に慣れてきている感じが否めません。このような中で新しい年度がスタートします。今年度は、with コロナでのような展開をしていけばいいのでしょうか。

2月の初め、病院で初めて患者さんが、新型コロナウイルス感染症に罹患し、対応に追われました。感染経路が不明の発症ということもあり、現場のスタッフの不安は大きかったと思いますが、一つひとつ基本に立ち返り感染対策をし、それぞれの業務に当たりました。日頃の感染対策活動が功を奏し3週間で終息に至りました。今のような感染経路が不明の中での対応は、現場スタッフはもちろん感染対策チームの連携が不可欠です。現場のゾーニングの工夫、スタッフの指導、環境整備等、業務内容を振り返りながら話し合い、動線の簡素化を行う等して、多大なエネルギーを費やしました。

新型コロナウイルス感染症は、医療現場のスタッフ全員に大きな負荷を生じさせています。

昨年度、看護部の研究発表があり、「**新型コロナウイルス禍の外来看護師のストレス・セルフケアの実際と課題**」というテーマで、ストレス評価尺度 (TMDP) を使用し、分析

した結果の発表が行われました。感染拡大に伴う業務の増加と未知のウイルスに対して先行きが見えない戦いを続ける不安やプレッシャーは、想像を絶するものです。新型コロナウイルス感染症疑いの患者の対応に追われ、業務が増大する現場では、混乱や心身の疲労が起こります。それに加え、離職者増加で人員不足による負担があり、調査結果からストレス尺度で73%がうつ状態・不安症状が強いことがわかりました。発表では、これらの対処法として、①**正しい情報を発信**②**マニュアルの作成・修正**③**ピアサポート**(家族、友人、同僚などに語ること)等、勤務継続を可能にしたセルフケアの実践についても触れられました。このような取り組みを通して、スタッフの医療従事者としての責務、使命感が困難を大きく乗り越える結果につながりました。感染の波を乗り越える度、スタッフ達のレジリエンスが高まっていると感じます。

病院では、患者さんや家族から寄贈された絵画が多くあります。その中の一つとして、外来の待合コーナーに川田美緒さんの油彩「夜の庭」「昼の庭」という作品を掲げています。花の作品が多い画家でイラストレーターとしても活躍しています。心温まる画風で、ホッとさせられます。時には、患者さんや家族から励まされエネルギーをもらいます。

困難な状況は変えることができませんが、現場の力を感じ、このような応援に支えられ地域に根ざした病院として前向きに取り組んでいきたいと思っています。



「夜の庭」「昼の庭」油彩 川田美緒 作 (外来の待合コーナーに掲示)